

西郷どんの生涯と 関わりのあった人たち



イト
21歳で西郷と結婚。
薩摩藩士・有川矢九郎が妻の従妹であるイトを突然連れてきて、結婚を承諾させたという



坂本龍馬
勝海舟に弟子入りし、西郷と出会った。西郷の初対面の感想を「小さく叩けば小さく、大きく叩けば大きく響く人」と語った

イトと結婚
沖永良部島から赦免され鹿児島へ帰還



川口雪篷
薩摩藩出身の書家、儒家。西郷に漢詩や書を教え、赦免後は西郷家に同居し留守役をつとめた

沖永良部島への遠島命令

徳之島へ遠島

召還状が届き翌年鹿児島へ帰還



愛加那
奄美大島に潜居中に愛加那と結婚。菊次郎、菊草が生まれる。家族と一緒に暮らせたのは、わずか2年あまり



菊次郎



菊草

奄美大島に潜居愛加那との結婚



島津斉彬
薩摩藩 11代藩主。いち早く西郷を評価した人物。斉彬の死によって西郷は自殺を考えるほど、大きな存在であった



月照

京都清水寺の僧。斉彬の死に際し、西郷の自殺を食い止める。幕府に追われ、西郷と錦江湾に身投げし死去

月照との入水

スガと結婚するが、すぐに離婚
薩摩藩の郡方書役助となる



大久保利通
西郷と同じ郷中で学んだ。西郷が沖永良部島から召還されると、共に倒幕と新政府樹立に活躍したが、西南戦争では敵対した



天璋院(篤姫)

島津斉彬の養女。1856年(安政3)13代将軍徳川家定に嫁ぐ。婚礼の嫁入り道具を揃えるため、西郷が奔走した

鹿児島の下加治屋町に生まれる

西南戦争にて自決

一八七七年
一八七四年 鹿児島に私学校を設立
一八七三年 明治政府を去り、鹿児島へ帰る
一八六八年 江戸城の無血開城
一八六六年 薩長同盟

明治十年	明治七年	明治六年	明治元年	慶応二年	慶応元年	元治元年	文久二年	文久二年	文久元年	安政六年	安政五年	嘉永五年	弘化元年	文政十年
49歳	46歳	45歳	40歳	38歳	37歳	36歳	34歳	34歳	33歳	31歳	30歳	24歳	16歳	0歳
鹿児島						沖永良部島 滞在1年6カ月	徳之島 滞在71日	鹿児島	奄美大島 滞在2年8カ月	鹿児島				

「詳説西郷隆盛年譜」
年齢は山田尚二編の年表による

西郷は朝鮮へ開国を求め使節団派遣を主張したが、大久保利通らに退けられ、明治政府を去った



勝海舟
幕府の海軍操練所頭取、陸軍総裁として西郷と無血開城の会談をした。西郷を大きく肚が据わった男と評価した



土持政照
沖永良部島の間切横目(警察の巡查)。母ツルと共に西郷の世話をし、劣悪な格子牢から救い出した命の恩人



島津久光
島津斉彬の死後、薩摩藩の実権を握った人物。西郷に遠島命令を出すなど、生涯対立する関係にあった

郷中教育により心身の鍛錬に励むが、右腕の負傷で剣の道を断念。学問を志して勉学に勤しみつつ、家の畑仕事などを手伝う



沖永良部島の歴史

- 一六〇九年 薩摩藩が琉球を制圧し、大島・徳之島・喜界島・沖永良部島・与論島を直轄地とする
- 一六一六年 徳之島奉行を置き、徳之島・沖永良部島・与論島を管轄
- 一六九〇年 徳之島奉行から沖永良部島・与論島を分立して代官所を設置
- 一八三〇年 大島・喜界島・徳之島三島の砂糖惣買入の開始
- 一八五三年 沖永良部島の砂糖惣買入の開始
- 一八六四年 土持政照が与人役に任命
- 一八七〇年 社倉創立
- 一八七二年 初めて戸籍調査が行われる
- 一八七四年 貨幣融通開始
- 一八七五年 代官所(在番所)を廃し、支庁を設置
- 初めて小学校設置
- 平民にも名字使用の許可
- 一八七七年 全島に十七の小学校を設置、女兒の就学開始



人望厚く義理堅い少年、藩役人になり鹿児島で活躍

下級武士の長男として生まれ、貧乏ながらも優しく育った西郷。ケガで剣の道を諦め学問に邁進し、やがて島津斉彬に見出されます。そして斉彬の亡きあと、苦難の道が続きました。

貧乏ながら 家族や兄弟思いの優しい少年

西郷は一八二七年（文政十）十二月七日、現在の鹿児島市下加治屋町にて生まれました。父・九郎隆盛、母・マサの長男で、幼名は小吉（こきち）。両親と兄弟七人、祖父母の十一人家族で、生活が苦しく貧乏な下級武士の家で育ちます。小さい頃から両親の畑の手伝いなどをして、弟三人・妹三

人の面倒をよくみる、優しいお兄さんでした。夜遅くまで針仕事をする母親の横で、西郷は兄弟と一緒に傘の竹の骨削りをして家計を助けます。母は「貧乏は恥ずかしいことではない、貧乏に負けることが恥ずかしいことですよ」と言い聞かせました。



厳しい鍛錬で心身の基礎を作った 郷中教育

薩摩の国では「国を守るために必要なのは頑丈な城ではなく、立派な人間をたくさん育てることだ」として、青少年の育成に力をいれた郷中（こじゅう）教育を行いました。郷中とは、五十軒程の家が集まった区画のことです。郷中の青少年たちは、六〜九歳が小稚児組（こちこぐみ）、十〜十三歳が長稚児組（おせちこぐみ）、十四〜二十二歳が二才組（にせぐみ）と分けられ、年長者が年少者を指導します。読み書きそろばんや礼儀作法に始まり、相撲、旗取り、水泳、山登り、馬追い、剣道、槍、示現流などなど、それは厳しい鍛錬でした。このような厳しい教育のお陰で、下加治屋の郷中からは大久

保利通、吉井友実、村田新八、大山巖、東郷平八郎など多くの偉人が生まれました。西郷は十歳頃に剣の道をあきらめ学問で身をたてる決心をしますが、それは他の郷中の少年に刀で右腕を負傷させられたのが原因です。



カリスマ藩主 島津斉彬に見込まれる

一八四四年（弘化元）、西郷は十六歳で郡方書役助という役職に就きました。農民が納める米の出来高を見積もって納めさせる書記係です。

一八五一年（嘉永四）島津斉彬が薩摩藩主になりました。斉彬は西郷の「国を大切にするには百姓を大切にしなければならぬ。農業は国の本（もと）」という意見に感銘を受けました。

斉彬は「西郷は薩摩藩の将来を担う若者だ」と期待を寄せ、西郷を庭方役に任命し江戸に連れていきます。庭方役とは藩主の秘書係で、重要なお使いをする仕事でした。

庭方役となった西郷は数多くの日本の重要人物と知り合い、国や政治に関する見聞を広めていったのです。一八五二年（嘉永五）には結婚しますが、留守がちのためすぐに離縁しました。同年に両親が他界し、家長となります。



黒船と後継ぎ問題で 大騒ぎ、安政の大獄

一八五三年（嘉永六）アメリカのペリールが来航。鎖国が開港か、日本国中が大騒ぎです。

そんな中、將軍徳川家定の後継ぎ問題が浮上。斉彬ら諸大名は徳川慶喜がふさわしいと擁立運動を起こし、諸大名や朝廷の人々との連絡係として活躍したのが西郷でした。

しかし当時の大老・井伊直弼は、徳川家茂を十四代將軍にしたばかりでなく、日本に不利益の多い日米修好通商条約を結んでしまします。諸大名が反発し抗議すると、井伊直弼は容赦のない弾圧を始めました。

幕府を廃止し朝廷が政治をするべきだ、と主張した吉田松陰や橋本左内などは死罪。さらに西郷や清水寺の月照にも危険が迫ってきたのです。



斉彬の死と 月照との入水自殺

一八五八年（安政五）七月、薩摩藩主の島津斉彬が他界し西郷は自殺しようと思いましたが、清水寺の僧・月照の説得により踏みとどまりました。

しかしその後、井伊大老の弾圧が薩摩に逃れた月照に迫り、藩庁は「日向送り」という実質的な死刑を命じました。

これを受けて西郷は、月照一人を死なせるわけにはいかないと、共に錦江湾に入水する道を選んだのです。

十一月の満月の夜、二人は抱き合い海へ身投げしました。西郷三十歳、月照四十四歳のことです。後に西郷は蘇生、月照はそのまま亡くなりました。

西郷が後追い自殺しようとするもの、斉彬の父・斉興は「西郷は将来の日本を背負う男だから、絶対に死なせてはいけない。しばらく大島に隠しておけ」と命じます。

藩は幕府から隠すため、西郷の名を「菊池源吾」と改め、奄美大島の龍郷村へ潜ませることにしたのです。



鹿児島時代 1827年～1859年



ひとくち知識

西郷の兄弟

西郷隆盛より六歳下。幼名は金次郎。兄に代わり、家政を取り切ったとされている。戊辰戦争では一番隊監軍として、越後長岡城の戦いに参戦。五十嵐川の戦いで負った傷により、一八六八年（慶応四）三十六歳で戦死。

さいごうきちじろう 西郷吉二郎 二男

さいごうじゅうどう 西郷従道 三男

西郷の十六歳下。山県有朋と共に渡欧し、帰国後は兵部権大丞となった。一八七四年（明治七）台湾番地事務都督となって台湾出兵を指揮。西南戦争では大山巖と共に政府軍の首脳を務めた。内閣制の発足とともに初の海軍大臣に就任する。一九〇二年（明治三十五）五十九歳で死去。

さいごうこへえ 西郷小兵衛 四男

西郷の二十歳下。末弟。十六歳で御代官所役助となる。戊辰戦争では奥羽戦に参戦し、戦後は京都や東京で洋学と漢学を学び帰郷した。西南戦争で小一番隊長を務めたが、熊本高嶺の戦いで二十九歳で戦死。

全国の西郷像

日本各地、九ヶ所に点在する西郷像。恰幅のよい姿、愛犬つんを連れた姿、やせ細った姿など、それぞれに違う西郷が見られる。



- 鹿児島市城山 西郷隆盛洞窟
- 鹿児島市上竜尾 西郷南洲顕彰館
- 鹿児島市武下二丁目 西郷屋敷跡
- 霧島市溝辺町 西郷公園
- 大島郡和泊町 西郷南洲記念館
- 大島郡和泊町 南洲神社

山形県 酒田市飯森山 南洲神社



東京都 台東区上野 上野公園

国難を憂いつつ、妻子に愛情を注ぎ、島民を助けた奄美大島

月照との入水自殺から蘇生した西郷。心機一転、奄美大島での生活が始まりました。最初こそ孤立するものの、次第に島での暮らしに安らぎを覚え、愛加那を妻にして家庭を築きます。

改名し龍郷上陸 馴染めぬ島の生活

一八五九年（安政六）一月十二日、西郷は奄美大島の龍郷村に上陸しました。名を菊池源吾と改め、身を隠すため藩から扶持米という給料をもらっての生活が始まりました。

上陸間もない頃、西郷は島に馴染めませんでした。当時は奄美をはじめ、南の島々を差別する政策がとられていたからです。本土とは違う島の言葉を理解できず、打ち解けるのに苦労したのでしょう。

西郷が書いた当時の手紙には、「けとう人」「ハブ性」「垢の化粧」など、島人を差別するような言葉も見られます。一方の村人たちは、驚く



ほど背が高く巨体の西郷に圧倒され、遠巻きに眺めました。また、西郷が松の木に向かって刀を打ち振る示現流の稽古が異様に映り、「大和のフリムン（島の方言で馬鹿者）」と呼んで近づきません。お互いが敬遠しあっていたのです。

苦しめられる農民 救済へと立ち上がる西郷

奄美大島や徳之島で大量の砂糖きびを作らせ、それを安値で買い取り高値で全国に売りさばっていた薩摩藩は、大変厳しく農民たちを支配して、奴隷のように扱っていました。

砂糖きびが不作の年、役人たちは難癖をつけて理不尽な折檻をおこない、農民を苦しめていたのです。

常々、農民と農業を大切にしなければ国の発展はないと考えていた西郷は、このままではいけないと、代官・相良角兵衛へ直訴しに向かいます。初めは強気だった相良は「殿様に手紙



を書いて現状を知らせる、そうするとあなたの立場も危うくなる」と言われたうえ、他の役人からも説得され、西郷の意見を聞き入れて謝罪しました。投獄された百姓は許され、農民への態度も改められて、島民たちは「西郷様のおかげ」と喜びました。

愛加那・菊次郎と過ごす 愛しの日々

村人たちとも次第に打ち解け、子供に学問を教えたり、米を分け与えたり、穏やかな生活を送っていた西郷。村一番の名家である龍家屋敷で龍佐民に面倒をみてもらっていましたが、彼が分家の娘である愛加那（あいかな）との縁談を持ちかけてきました。

一八五九年（安政六）西郷は三十一歳で二度目の、愛加那は二十三歳で初の結婚となりました。

一八六一年（文久元）一月には、長男の菊次郎が誕生。二人目の子（菊草）を身ごもり今の家では手狭になるからと、十一月、集落の中に新居を構え家



族で移り住みます。

穏やかで平和な島暮らしが始まろうとしていた引越しの翌日。新築転居祝いの最中に、藩からの召喚命令が届きました。

島から出ることを許されない愛加那は、鹿児島についてくことはできません。幼い菊次郎と、もうすぐ生まれる娘・菊草と共に、島に残るしか道はありませんでした。

約二年八カ月をともに過ごした愛加那とお別れに際し、西郷は水田一反、畑一反を買い与えました。

西郷は島に三年滞在したことから、名前を大島三右衛門と改め、一八六二年（文久二）鹿児島へと帰っていきま

奄美大島時代 1859年～1861年

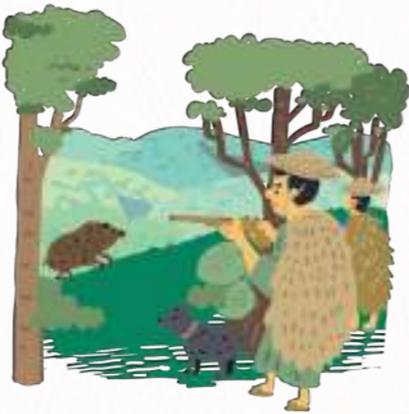


名人をあきれさせた 狩りでの大失敗

漁猟が大変好きな西郷は、大島でも小島を撃つたり、猪狩りをしたり、龍郷湾では釣りに興じたといわれています。ある時西郷は、龍郷に住む狩りの名人、宮勇気（みやゆうき）と友人になって狩りに同行し、鉄砲うちを任せられました。

しかし、追い込んだ獲物を逃がしてしまします。「こんなに下手な鉄砲うちを見たことがない」とあきれさせましたが、再挑戦。二度、三度と挑戦するもすべて失敗に終わりました。

大いに怒る宮勇気に「すまん、すまん」と謝る西郷。帰り道の民家で一頭の豚を買い、二人がかりで担いで帰ると、皆で豚汁にして愉しみました。それから後、二人はたびたび連れ立って猪狩りに出かけ、大物をしとめたとい



ひとくち知識

西郷が二カ月だけ住んだ「南洲流論跡」

龍郷にきてから、西郷は三度も家を移っている。一番目は鹿児島から流人の空き家。二番目は龍郷の名家、龍家の本家。三番目は愛加那、菊次郎と暮らした新居だが、住んだのはたった二カ月だった。現在の流論跡の家は、愛加那の養子・龍丑熊が原型そのままに再建したもので、最初の棟木は西郷が築いた当時のままに残っている。



南洲流論（るたく）跡の写真 写真 / 龍郷町役場より提供

船のとも綱を 結び付けた西郷松

一八五九年（安政六）、西郷が乗船した福徳丸のとも綱を結びつけたといわれる松。松枯れて伐採されたが、その幹は西郷と愛加那の木像となって、龍郷町の「りゅうがく館」に飾られている。



西郷松 写真 / 龍郷町役場より提供

愛加那と子ども



あいかな 愛加那 西郷隆盛の島妻

西郷と結婚し授かった菊次郎と菊草は、のちに西郷家に引き取られ、離れ離れに暮らす。ひとり島に残り、畑仕事や姉女子への織物指導などを行ったといわれる。一九〇二年（明治三十五）六十六歳でその生涯を閉じた。



きくじろう 菊次郎 西郷隆盛の息子

九歳で鹿児島の本家へ引き取られる。十二歳でアメリカ留学した後、西南戦争に参加し右足膝下を切断する。一八八四年（明治十七）からは外務省に勤務し、台北県支庁長、宜蘭庁長に赴任。帰国後の一九〇四年（明治三十七）に京都市長となる。一九二八年（昭和三）、六十七歳で死去。



きくそう 菊草 西郷の一人娘

十四歳で鹿児島島の西郷家に引き取られ、名を菊子に改める。一八八〇年（明治十三）大山麓の弟で西郷の従弟である大山誠之助と結婚。一九〇九年（明治四十二）四十八歳で死去。

二度目の遠島生活、 徳之島で過ごした七十二日間

奄美大島での家族水入らずの生活から一転、鹿児島に帰った西郷。本土での新しい人生が始まるかと思いきや、島津久光の逆鱗に触れ、今度は徳之島に流されることになりました。

わずか四カ月の鹿児島 再びの遠島命令

西郷が奄美大島から鹿児島へ帰ってきたころ、薩摩藩主忠義の父・島津久光は、江戸にのぼり武力で「公武合体」を迫ろうともくろんでいました。

西郷は「田舎者のあなたには無理だ」と反対しますが聞き入れません。正論を拒まれたので、指宿に療養へ出かけます。指宿から帰ってきたころへ、大久保利通が訪ねてきました。「全国に尊王派の友人を持つあなたが久光様の案内を務め、京都や江戸にのぼってほしい」と久光との仲を仲裁したのです。西郷は国の状況や大久保の立場を考え、上京を決定します。

命令通り、一足先に下関で久光が来るのを待つつもりでいた西郷は、思いもよらない現状を知らされました。京都に集まっている攘夷派の志士たちが、京都に到着した久光を大将にして、幕府を倒す戦いはじめる準備をしている



上げるのが精いっぱいの中、大きな石を頭の上まで持ち上げた西郷。「先生は村一番の力持ちじゃ！」と、村中に噂が広がりました。

後々まで交流の続く 仲為・仲祐との出会い

間切横目の仲為（なかつため）が初めて西郷に接したとき、西郷の風貌や言葉遣いなどから、ただ者ではない非凡さを感じたようです。

仲為が西郷に「自分の居所である岡前村に転居し、子供の教育に当たって欲しい」と願い出ると、気さくで謙虚な人柄の仲為に惹かれ、西郷はその願いを聞き入れました。

仲為は、十七歳の息子（養子）仲祐（なかつゆう）とその第五郎を西郷のもとに連れてゆき、水汲み炊事や雑役をさせ、時間の空いた時には学問を教えてもらえるよう計らいます。仲為自身も、徳之島滞在中は色々とし郷のお世話をしました。

西郷が沖永良部島から赦免されて帰国すると、仲祐は西郷を慕って学問修行のため上国しました。

るといいます。

西郷は、そんなことをしたら薩摩は幕府に潰されてしまうからと、独断で下関を出発し、大阪に向かいます。

下関で待っているはずの西郷の姿がなく、久光は命令に背いたとして激怒して、遠島を命じました。

鹿児島に帰還してわずか四カ月あまりの西郷は、再び南の島へと流されることになったのです。



たった二日間の家族の再会 そして遠島命令

八月二十六日、奄美大島から愛する家族、愛加那と菊次郎、そして生まれたばかりの菊草が徳之島にやって来ましたが、西郷は久々の再会を心から喜び、家族で過ごせる幸せを噛みしめます。

しかし楽しい時間も束の間。夕方には、代官付役の中原万兵衛が藩からの命令書を届けに来ました。

内容は「西郷を沖永良部島に島流しにする。島に着いたら、昼夜番人をつけた困いの中に入れろ」というものです。

親子水入らずの楽しい時間に届けられた非情な通達。鹿児島から五七〇キロ離れた沖永良部島へ流されるのは、当時死罪に次ぐ重い罪でした。

西郷は中原に「切腹の命令だと覚悟していたため、命だけは助けてくれるのがあるがたいことだ」と心えました。

いよいよ家族との別れの時。西郷は愛加那に「子供二人を丈夫に育ててくれ」と告げ、子供らには「元気で大きくなるんだよ。さあお別れだ！」と言って抱きかかえ、頬ずりをしました。

突然の悲運に愛加那は泣き崩れ、たった二日間だけの家族の時間は終わってしまったのです。

翌二十七日には準備を済ませ、二十八日早朝、七十人あまりの村人たちが西郷の荷物を運んで井之川港に同行。

一八六二年（文久二）閏八月十四日、西郷は徳之島の井之川港を出帆しました。

徳之島時代 1862年



徳之島の滞在地



大石を持ち上げた 村一番の力持ちとなる

一八六二年（文久二）七月初旬、徳之島の湾屋港に到着。西郷三十四歳のときです。

岡前村に落ち着いた西郷ですが、当時島の青年たちの間では「力石」と呼ばれる石を持ち上げる力試しが盛んに行われていました。

大きな石は約七十二キロ、小さい石は五十キロほどの重さです。どんな力自慢も胸当たりまで持ち



西郷の腰かけ松

ひとくち知識

井之川の松の下で 島民を励ます

非常な運命に見舞われた西郷。愛しい妻子と泣き別れた悲哀は、護送のため移った井之川港まで続いた。その傷心をいやしたのには地元役人の親切な対応と、松の木があった。

沖永良部島に護送されるまでの十七日間、間切横目奥山宅に身を寄せた西郷は、築山の松の根に腰かけ、村人に「役人は自らを正して村人を指導し、百姓は怠けず一生懸命働いてください。私は鹿児島に帰れたらみなさんの役に立ちたいと思います。みなさんも頑張ってください」と語ったと伝えられている。

西郷は、かねがね砂糖政策の厳しい収奪が気になっていた。おそらく、その改善を藩庁に働きかけようと、心密かに決意していたのだろう。



なかつゆう
仲祐
西郷隆盛の教え子

仲為の養子。西郷の赦免後、鹿児島へ渡って西郷家に寄宿し、川口雪達から指導を受ける。

西郷の上京に同伴するが痘瘡にかかり、一八六六年（慶応二）二十一歳で死去。

西郷は仲祐の死を嘆き悲しみ、翌年には墓石を建立。永代供養費として、寺納金千疋を奉納した。※千疋：現代のお金にして二五〇万円位と推定される。

沖永良部島への護送 船中から一歩も出ず

沖永良部島へ向かう船の中、西郷は帯刀を外され宝徳丸の牢に入られた。途中、護送にあたっていた積用喜など役人が、船中から出てくつろぐよう勧めた。しかし西郷は君命だからと聞き入れず、一人黙想を続け、船中から一歩も出なかったという。

同日の夕刻に伊延港に着いたが牢が完成するまでの二日間、船牢の中で過ごし、一八六二年（文久二）閏八月十六日に上陸して和泊の格子牢に入った。



死の危機を乗り越え、 天意を悟った沖永良部島

過酷な格子牢で生死の淵に立たされ、極限状態になりながら、新たな思想の境地へと辿り着いた西郷。その命を助けた土持政照との出会いは、後の日本の歴史を左右する出来事でした。

死罪に値する遠島命令 覚悟の上陸

一八六二年（文久二）閏八月十四日朝、西郷を乗せた船は徳之島を出帆。その日の夕方、沖永良部島の伊延港に到着、十六日に上陸しました。
迎えにきた代官に馬に乗るよう勧められた西郷ですが、「もういつ土を踏めるかわからないので、どうか歩かせてほしい」と、歩いて牢へと向かったのです。
当時死罪にも値した沖永良部島への遠島命令を受け、西郷は長期の囚人生活を覚悟したことでしよう。



過酷な野ざらし牢と 極限からの生還

西郷が入られた牢は、四畳半ほどの広さ。戸や壁はなく、吹きさらしの格子牢でした。
昼間、西郷の体には容赦なく太陽が照り付け大量の蚊がたかります。十月〜十二月ともなると、南国の沖永良部島も冷たい北風が吹き気温が下がりました。
台風が上陸すれば雨風や砂が直撃し、皮膚に血がにじむほど。それでも西郷は座禪を組み、瞑想を続けました。
汗とあかでひどい臭気を放つ着物。おまけに便所が牢内にあるためハエがたかり、牢生活は劣悪な環境でした。また食事も粗末なものです。
日を過ごすうちに痩せ衰えてゆく姿に、政照は西郷の命の危機を感じました。
そこで代官に「命令書には『困いに入れよ』と書かれています。困いというのは、家の中に作った座敷牢のことです。新しい座敷牢を作るのを許して

ください」と進言します。
代官は政照の機転の利いた提案に賛同し、さっそく新しい座敷牢作りを許可したのでした。

西郷は「牢屋で死ぬのかと思ったが、あなたのおかげで命拾いしました」と泣きながら感謝しました。
あえてゆっくり建てさせた座敷牢は、約二十日で完成。建築中、西郷は政照の家で徐々に体調を回復させていったのです。



沖永良部島時代1862年～1864年



恩人・土持政照と交わす 義兄弟の契り

格子牢での苦境に耐え、座敷牢での新しい生活を始めた西郷は、「今生きているのは土持政照のおかげだ。立派な人間である政照と義兄弟の契りを結び、共に世のため国のために働きたい」と思うようになりました。

しかし、罪人である自分が義兄弟を願っているのはいかがなものか、政照や政照の母ツルはどう思うだろう、という迷いや不安が消えません。

一八六三年（文久三）三月の末、意を決した西郷は「酒と肴を用意して、お母さんと一緒に牢に来てほしい」と、政照に伝えました。

そして、自分の正直な気持ちを打ち明けます。「罪人である私がこんなお願いをしてよいものか迷っていましたが、思い切って申し上げます。政照さんとお母さんの親切は、私には他人のように思えません。どうか私と政照さんに、兄弟の約束をさせてください」。

政照親子は大変喜びました。そして西郷はツルと「今日からの西郷を本当の子供だと思ってください」と杯を交わしました。

次に「政照さん、つまらない男ですが、私が年上なので兄になりますよ」と言って杯を政照にもさしたのです。政照親子は、「こんなに嬉しいことはない」と感謝しました。

西郷はこの心境を漢詩に作り、政照とツルは鳥唄で返したということです。



ひとくち知識

◆ 格子牢での食事と西郷の思い

西郷が格子牢に入っている間朝に炊いた飯が三度の食事だった。昼と夜には飯に湯をかけ、飯をふやかして食べていたようだ。飯以外の食べ物も、塩とわずかな漬物のみ。西郷は「御馳走を食べて死んだ人間の顔は醜く、粗食で死んだ人間は死に顔がきれいだといわれている。ならば私はきれいに死にたい」と言って政照の持つてきた御馳走を断っていたという。



湯通しの穴が開けられた茶碗
写真 / 公益財団法人荘内南洲神社より提供



当時の様子を再現した格子牢
写真 / 西郷南洲記念館敷地内（沖永良部島）



つちもちまさてる
土持政照
西郷隆盛の恩人

和治方の間切横目（警察の巡査のような役）を勤める。西郷のために座敷牢を作り命を救った。西郷に見込まれ、様々な教えを受ける。一八七〇年（明治三）『社会趣意書』をもとに、互助組織を設立した。一九〇二年（明治三十五）、六十九歳で死去。

◆ 島民たちの服装

当時の島民は、植物の芭蕉から取る糸で織った「芭蕉衣」を着た。女性は丈が長く、男性は短かったが、男性でも島役は丈が長かった。島役や女性は木綿衣も着ていたという。



写真 / 和治町歴史民俗資料館所蔵



力自慢を投げ飛ばし 圧勝の相撲

西郷に相撲を取りたいと頼まれた政照が、沖永良部島で一番の相撲取りといわれる、環潤を連れてきました。三番の取り組みは、すべて西郷の圧勝という結果に終わります。

次に連れてきたのは三五郎という付役の家来。もとは宮相撲の大関だったと、力自慢の男でしたが、二番共に西郷に負けてしまいました。

その晩、三五郎の主人は「彼は力自慢ばかりで主人の言いつけを聞かず、友人をいじめて困っていた。これで少しは懲りるはずだ。ありがとう」と西郷に礼を言いました。



牢の中から、少年たちに 学問を教える

徳之島に渡る時、西郷は「四書五経」や「韓非子」をはじめ、多くの本を持ち込み、それらの書籍を沖永良部島へも運んで倉庫に保管してありました。

座敷牢に移ると、朝から晩まで本を読み勉強を重ねます。持ち込んだ本だけでは足りず、たくさん蔵書を持つ操（みさお）家の本を借り、勉学に励んでいたのです。

すっかり健康な体に回復した西郷は、政照の恩義に報いるため、島の子どもたちに読み書きを教えることにしました。塾長は、操家の十六歳の息子・坦勁（たんけい）です。

坦勁と共に学ぶ西郷の弟子は増えてゆき、最終的には二十名ほどとなり、



朝から昼までは素読の指導、夜は講釈（講義）を行いました。

ある日、西郷は弟子の坦勁に問いかけます。「家族が仲良く笑顔で暮らすためにはどうすればいいか。」

坦勁は「君に忠義、親に孝行、夫婦仲むつまじく、兄弟仲良く、互いに助け合う五倫五常の道を行えばよいと思います」と答えました。

書物から抜き出したような回答に、生きた学問を教えるチャンスだと思つた西郷は、次のように教えます。

「それは大事な道だが、一番大切なのは欲を離れることだ。美味しい食べ物や家族で分け合い、よい着物を着るのは年上から順に、自分のは最後にすること。こうすれば仲良く楽しい家庭になる。」

このような教えを受け、弟子たちはますます西郷を尊敬し、慕うようになりました。

国の窮地を救うため 決死の想いで作つた報恩丸

一八六三年（文久三）七月、薩英戦争が勃発。二カ月後、その噂が西郷の耳に入ってきました。

「イギリスの軍艦が襲来して戦争が起こり、街が焼き払われた。薩摩軍は大量の戦死者を出した」という内容です。

西郷は、島を抜ければ死刑になるが、このまま何もせずに島にいることはできないと覚悟を決め、すぐに鹿児島に上る決意をしました。

政照に胸中を打ち明けると、すぐに賛同し同行することが決まりましたが、鹿児島に行くための船がありません。そこで政照は下男と下女を奉公替えして、そのお金で船を作ることにしたのです。

政照は代官役所にて官有林の払い下げを願い出て許され、さっそく船作りが始まりました。

十一月、「報恩丸」と名付けられたマラン船が完成。天気が良くなるのを待っていた時、鹿児島からの情報が入ります。薩摩軍の砲撃によって、イギリス艦隊は逃げてしまったというのです。二人は肩を抱き合い喜びました。

その後、薩英戦争のお見舞いのため、役人の操垣裁が報恩丸で鹿児島へ上ることになります。西郷は藩主宛に「薩英戦争やペリーの沖縄来訪から考え、沖永良部島にも大砲を備えてください」と手紙を書いて垣裁に持たせました。



ひとくち知識



そていりょう
蘇廷良
和泊方の与人

西郷の牢屋から川を挟んで五百メートルの地に住んでいた与人。一八八〇年（明治十三）には、和泊、和地区の戸長（町長）となった。西郷が初めて書に「南洲」という号を使つたのが、蘇廷良へ送つた漢詩だったといわれている。



蘇廷良に送つた漢詩
写真 / 「大西郷遺墨集」より複写

【謝貞郷先醒恵茄子】
麗色秋茄一段奇
依然芳味倚君知
正要見厚情深処
添賜佳声最悦嬉



◆報恩丸の模型 （西郷南洲記念館所蔵）

報恩丸の船の種類、マラン船は「馬艦船」と書き、全長約十六メートル、船速約十五キロ／時と推測される。船の名付けを頼まれた西郷は、島民の人々の恩義に報いるための船として、「報恩丸」と命名した。



報恩丸の模型
写真 / 西郷南洲記念館（沖永良部島）

◆島の家屋

台風の通り道にあたる島の家屋は、屋敷林で囲まれていた。屋敷には藁葺きの「ムライ表」とトーグラ（台所）の二棟の住居と、高倉があった。湿気が多い島ではこの高倉に初を保存した。高倉は富の象徴でもあった。



高倉
写真 / 知名町住吉

胸中を赤裸々に綴る 西郷の漢詩



西郷は生涯で 200首以上の漢詩を作ったと言われています。そのうちの 20首程は沖永良部島で作られました。西郷の詩はとても叙情的。現代に生きる私たちが読んで、思わず胸が熱くなるような、豊かな感性に心を打たれます。そんな西郷が牢内で作詩したと伝えられる漢詩二篇と、政照に贈った漢詩一篇をご紹介します。

獄中有感

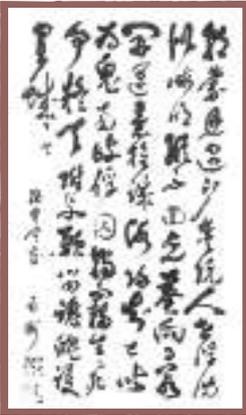


写真 / 山田尚二編
新版「西郷隆盛漢詩集」より複写

皇城 何疑天附与願留魂魄護
鬼為南嶼俘囚独窃生生死
開運意推誠洛陽知己皆
似明晦縦不回光葵向日若無
朝蒙恩遇夕焚阬人生浮沈

〈大意〉
朝にもてはやされたとすると、夕には生き埋めになる。人生は昼と夜がめぐむようなもの。たとえ光が差さなくても葵の花は太陽に向かう。もし運が開かずこのまま囚われの身となつたままでも、心だけは忠誠の一つで押し通すつもりでいる。都で親しく交わっていた勤王の同士たちは皆処刑され、南の小島で牢の中にいる自分一人だけが生き残った。生も死も共に天の与えるもので、人間の力の及ぶものではないが、願わくば命はなくなつても、魂だけはこの世に残し留めて、いつまでも皇居をまもりたいものである。

(西郷南洲記念館展示パネルより引用)

偶成



写真 / 山田尚二編
新版「西郷隆盛漢詩集」より複写

雨帯斜風叩敗紗子
規啼血訴冤譁今宵
吟誦離騷賦南竄愁
懷百倍加

〈大意〉
雨が斜めに吹き付ける風と一緒に、バショウの葉を叩き破りホトトギスが血を吐くような声で、無実の罪を訴えているかのように、やかましく鳴いている。こういうもの寂しい夜、離騷の賦を吟じよむと、南の小島に流されてる悲しい思いが百倍も加わる。

(西郷南洲記念館展示パネルより引用)

※離騷……楚国の政治家・屈原の代表作。屈原は、内政・外政に活躍するも、冤罪により王に追放され汨羅(べきら・中国の川)に身を投じた。

留別政照子



写真 / 土持綱義著
「流謫之南洲翁」より複写

別離如夢又如雲欲去還
来淚泣汙獄裡仁恩謝無
語遠凌波浪瘦思君

〈大意〉
別れは夢のようであり、また雲の上にいるようであって現実とは思えない。立ち去ろうとは思いが離れがたく、戻って来ては涙がとめどもなく流れてくる。獄中で受けた君の情け深い恩義には、感謝の言葉が見つからない。鹿児島に帰ると遠く海を隔ててしまうが、身が痩せるほど君を思う気持ちが強くなるであろう。(1846年(元治元)2月11日、政照に送った別離の漢詩)



漢詩や書の師 川口雪篷との出会い

川口雪篷は陽明学を学んだといい、詩や書の達人でもあります。西郷が沖永良部島に来る前に遠島されて西原村に住み、村の少年たちに学問を教えていました。ある日、雪篷は西原で出会った政照に西郷に自分を紹介してほしいと頼みます。政照がそのことを告げると、西郷は喜んで快諾しました。西郷と雪篷は同じ薩摩弁で意気投合し、それから毎日のように牢屋を訪ねて来るようになったのです。西郷は雪篷から書を教わったり、漢詩を添削してもらったりしました。雪篷は座敷の外で昼寝をすることが多かったため、西郷は「睡眠先生」と名づけました。しかし、酒に酔ったの昼寝が多かったので「睡眠先生」と改めました。ある日、夕方遅くに訪ねてきた雪篷に遅くなった理由を尋ねると「朝早く西原を出たものの、なぜか道に迷ってしまった。どうしても牢がみつからないので、野原に寝転んで昼寝をした。目が覚めると陽が傾き始めたところで、近くのお百姓さんに聞いてようやく辿り着いた」と言うのです。話を聞いた西郷は大笑いし、今度は「迂闊先生」と呼び名を改めるように言いました。雪篷は「名前がたくさんあったほうが便利でよろしい」と大笑い。こんな風に二人は冗談を言い合ったり大いに笑ったり、国難を論じたり、腹を割って話せる親友となったのです。

ひとくち知識



かわぐちせっぽう
川口雪篷
儒家、書家

薩摩藩の儒家、書家。陽明学を学び、薩摩藩に仕えた。父と兄が罪に問われ、その連座制によって一家離散、沖永良部島に遠島される。雪篷本人は、公の本を無断で質に入れ、その金で酒を買い島流しに「あつた」と西郷に語っている。島では子供たちに学問を教え、西郷に書と漢詩を教えた。鹿児島に帰ってからは西郷家の留守居役を務めた。また、西郷家の子供たちの教育にもあたったという。一八九〇年(明治二十三)七十一歳で死去。

◆ 当時の遠島事情

西郷が沖永良部島に遠島になっていた当時、島には百人近くの遠島人がいたと言われている。おのおの農家の手伝いをして自給自足の生活を送るが、学問のできるものは先生として子供たちに勉強を教えるなどして暮らしていた。しかし西郷は牢に入れられ、外出は禁じられていた。特に最初の格子牢の過酷さは、死罪にも等しいものであった。



政照に島の未来を託し 与人役大体を授ける

「政照は若い、将来きつと島を背負う男になる」そう考えていた西郷は、彼に役人の心得を教えておけば、必ずや島民を幸せに導くだろうと考えました。

与人役大体（村長の心得）

- ・人民の不幸は役人の良し悪しによって決まる。
- ・よい役人とは……
- ・百姓をかわいがり、百姓の喜びを自分の喜びと考え、百姓の不幸せは自分の不幸せと考え、仕事する役人
- ・自分のために欲を持たない役人
- ・代官の命令でも、まず百姓のためになるか考え、百姓をいためることは絶対にしない役人

横目役大体（警察官の心得）

- ・警察官は罪人を罰するよりも罪人が出ないように人民を指導せよ
- ・よい行いをしたものは大勢の前で表彰し、病気の者や不幸な者がいたときは、これをいたわり助けることが大事



飢饉に備える互助制度 社倉法

毎年のように台風が襲い、干ばつなども繰り返される沖永良部島は、いつ大飢饉に陥るかわかりません。そこで西郷は、「社倉趣意書」を政照に授けました。

社倉趣意書（非常時に対する備え）

- ・豊年のときには、みんなで米や粟や麦などを高倉にたくわえる
- ・飢饉のときには、みんなに配給する
- ・心をひとつに、力を合わせてあたるのが大事

政照はこの教えを守り、他の与人とも相談して一八七〇年（明治三）に沖永良部社倉を作ります。社倉は、飢饉の際に人々を助けるだけでなく、その利益で困窮している人を助け、病院を建て、鹿児島に留学生を送るなど大きな働きをしました。



牢屋にいながら 大イカを釣る方法

ある日西郷は、木を削りイカ餌木を作っていました。イカ餌木とは、甘木で魚形を作り、そのしっぽに針を付けたもの。海に投げて舟でひくと、イカが釣れるという疑似餌です。数日後、政照が西郷を訪ねると「ゆうべ神様から、座敷牢の中に座って大イカを釣る方法を教えてもらった！」と、二杯の大イカを前に笑っています。

不信に思った政照が誰からもらったのか聞いてみると、「実は、徳之島に流された時の船員が、昨日あいさつにきた。私が作ったイカ餌木を見て『ぜひ貸してください、いっぱい釣って差し上げます』と言ったんだ。だからこれは、ゆうべ彼が釣ったものだ。」

しかし、あの上等なイカ餌木をそのまま持ち帰られてしまった。不屈きな男だ」と笑う西郷でした。



ついに許され、鹿児島へ帰還

西郷が沖永良部島に流されている間に、世の中は激動の時代を迎えます。国内では天皇中心の世にしたい「尊王」、徳川幕府を補佐する「佐幕」と真っ二つに分かれて争い、外国の国々は隙あらば乱れた日本を植民地にしようと狙っていました。

当時薩摩の実権を握り、西郷を遠島にした島津久光ですが、藩内から湧きおこる「西郷を呼び戻してほしい」という声を無視できなくなり、ついに西郷を赦免したのです。西郷は沖永良部島を離れるにあたり政照の母へ桐の火鉢を、政照にはイカ餌木や、先の藩主島津斉彬からもらった縞ちりめんの合わせ羽織などを形見として贈りました。

長浜沖に停泊している船「胡蝶丸」から浜辺に着いた小舟には、弟の西郷従道と幼馴染である吉井友実の姿もありました。

西郷は、喜界島に流された村田新八も当然一緒に帰ると思っていました。が、赦免されなかつたと聞かされ「俺より罪の軽い村田が後になってはいけない。責任は俺が持つから船を喜界に回せ」と決断します。

当初一週間ほど島に滞在する予定でしたが、石炭が不足したためその日のうちに出發することになりました。夜中の午前一時、西郷を乗せた胡蝶丸は、沖永良部島を後にしたので。

ひとくち知識

◆ 沖永良部島にいない猪肉を食べる

猪がいないため、猪肉を食べる習慣がなかった沖永良部島。猪肉が好きたった西郷は、奄美大島から塩漬けの猪肉が贈られてきたので、鳥殺や詰役にも分けて珍しい猪肉を意味したという。



◆ モテモテの西郷

西郷は女性にも非常にモテる男だったようだ。当時、島の女性たちは好きな男性に「手拭」を贈るのが慣わしだった。そんな手拭を西郷は手紙と共に祖母へ送っている。手拭は芭蕉糸で一枚一枚手作りで織って作られており、西郷はこれを正月のお祝いに複数枚もらったという。

手拭と一緒に祖母へ送った手紙写真、和泊町歴史民俗資料館所蔵レプリカ撮影



むらたしんぱち
村田新八
西郷の弟分

幕末から明治維新にかけて活躍した薩摩藩士、年少の頃より西郷に兄事。西郷が沖永良部島に遠島になるのと同時に、喜界島に遠島になる。赦免後も西郷を助け、戊辰戦争では薩摩軍の軍監として軍功をあげる。一八七二年（明治四）に宮内大丞となり、岩倉遣外使節団に加わって米欧を巡遊した。帰国後は鹿児島にて桐野利秋、篠原国幹らと私学校を設立。西南戦争では薩摩軍の一番大隊長となり各所で奮戦した。一八七七年（明治十）城山で戦死。享年四十歳。勝海舟には「大久保利通に並ぶ傑物なり。惜哉、雄志を盡して非命に斃れたる」と評されたという。

◆ 島富への贈り物

船が出航する直前、鹿児島言葉で話せる青年として、獄中の西郷の世話をしていた島富が駆け付けた。沖に向かっていった西郷の小舟はそれに気付き浜へ引き返す。西郷は島富に最後に会えた喜びを伝え、形見に身に着けていた肌着を帯で巻いて投げ与えたと伝えられている。



島富に与えた帯
写真 / 和泊町南洲顕彰会発行『えらぶの西郷さん』より複写